

知ってたんだね

亜佐子小母

つわりが始まって以来、出産直前に至るまで、何か月間も抱えてきた身体の不具合——吐き気やむくみ、だるさ——は、午前三時過ぎの出産を終え、朝までひと眠りすると、切開がなされた会陰部の痛み以外はすっかり解消されていた。

ただ、そういえばと、ベッドに入る前に目にした下腹を思い出した。

そして、特に断わる必要はないのに、思い付いたように部屋の鏡の前に立ち、「見ますね」と、ひと呼吸ついてから、鏡越しに寝間着を開いてみた。

下腹は、ブカツというカンジでそこにあった。

中に入ったものが出ていっても、目一杯まで膨らんで伸び切ったものがまだそのまま、大きな仕事を終え、放心状態にも、これからどうなればよいのか指示を待っているようにも見えた。

寝間着を元に戻し、その下腹あたりを両の手で包むように覆った。

それから寝間着の下に手をやると、そのあたりは成る程疲労したような質感で、何かに鼻の奥をキュッと掴まれたような感覚があり、それと同時に、越えてきた妊娠中の月日を感じ、劳いの想いと一緒に涙が溢れた。

目の前に見える自分、鏡の中には、ただの私だけの姿が映っていた。かさが減り、元の重心を思い出そうと探っている分が手伝って、頼り無さ気で、とりたてて、何かを成し得そうにはない女に見えた。

しかし数時間前、間違いなくこの女のカラダから、私のこの身体から、確かに赤ん坊が出てきた。

吐き気やむくみ等の身体的負担に苛まれ続けた、えらく長く感じたトンネルから、ようやく抜け出たのだ！

そして、その間強く感じていた使命感、責任からも、ひとまずは解放された。

自ずと緊張はほどけ、安堵もした。それから、改めて身軽になった自分を確認すると、「私はこれで、人のお母さんになったのだらうか……」

「……でもそうだ！ 少なくとも、この私子どもを産んだのだ！」

頭と身体と心情の、記憶と実感ががびつたりと重なり、はっきりとした動かぬ事実となった。

知ってたんだね

「出産」、「命の誕生」という神秘体験が、完全に私のものとなった。

そして、出産後数時間経った今でも、この到達感はまだ興奮の域にあり、僅かな睡眠では薄まらないまま、身体の中に充満しているようだった。

何故なら、鏡の中の私の目が、まだ十分にその熱を帯びているのに気付いたからだ。

そしてその目は、何かを伝えているようでもあった。

——数時間前、確かに私から赤ん坊が生まれた。おそらく、無事なお産だった。そして、ヒトのカタチをしていた。出てくると直ぐ、胸のあたりに乗せられ、肌と肌とで互いに「あなただったのね」と、挨拶のようなもの、初めてのスキンシップを交わした。

助産師さんが赤ん坊の口を私の乳首へ寄せると、赤ん坊はそのまま吸いついてきた——。何も教えられずとも、向こうはすべきことを知っているようだった。私は再び鏡の中の自分と目を合わせた。

——「ああ。多分、真実だ。あれが」

ふいに浮かんだこんな考えは、浮かんだ瞬間に、「きつとそうだ」「そうに違いない」という確信となった。

私も同じように生を受けて生まれてきた。今まで生き、今こうして存在している。

——全てはこのためだった——。

女であったことも、幼い頃に実母を亡くしたことも、結婚するまでフリーターで、社会的に何者でもなかったことも、子どもを授かるまでに、数年かかったことも。

きつと、どれもが必要で、意味があったのだろう。全てが繋がっており、そして、やっとここに辿り着いたのに違いない。

鏡の中の私の目も、はつきりと、

「その通り。このことこそが、あなたの理由です」と、応えているように見えた。

こうして、遅過ぎる覚悟がやっとできた。そう。遅過ぎる覚悟が。でも、決してゆるがない覚悟が。

私は、直ぐさまその決心を伝えようと、新生児室へ向かった。

でも正しくは、身体が決断し、私を運んでいたような気がする。私のはつきりとした覚悟、決意を待っていたのかもしれない。

私は、まだ思うようなスピードでは歩けないくらいの速度で新生児室へと進みながら、でも、急速に、気分が高揚してゆくのを感じていた。少しでも、足を早めようとしていた。——今まで全く知らずにいた、全く出会うことのなかった真実——と、きつと又出会うのだろうと、予感していたからである。

どうやらあちらは、私の知らない真実を、幾つも知っているに違いなかった。

長女との関係性は、こうして私の方が完全に、教えてもらおう立場、受け身の立場としてスタートしたのだった。

二

「まず、知っておいてもらいたいのはね、貴女方は、自分で産めるということ。産む力を持つているということ」

そんな言葉で始まった、助産院での説明会。それからここは、赤ちゃんが生まれてくるのを、お母さんが産むのを、手助けする場所なのだとも言われた。

長女は八才になっていた。

幼稚園に入る頃から、自分も妹か弟が欲しいと口にするようになっていた。

私は「ふーん。そうだね」と生返事しつつ、再びあの辛いつわりの時期を過ごさなくてはならないのかと思うと、憂うつに感じるだけだった。

そして何より、娘の成長が、存在が、喜びそのものになっていた。日々、感動と新たな発見があり、私はその日、その時が「一番」だと信じた。娘の「今」と、「これから先」だけを見ていたかった。「前」だけを向いていたかった。

——出産後、おっぱいが出ずに泣き、娘はというと、四六時中抱っこしていないと泣き止まず途方に暮れた。そして、食物アレルギーに戸惑い、おののいた日々——。

もう、一日でさえ、ましてや妊娠中、妊娠前になど、決して戻りたくなかった。ただただ、目の前の娘の生命力と輝きを享受し、その幸せに浸っていたかった。

そして傲慢にも、それはこれまでの自分の働きに対する当然の権利だと、特に悪びれることもなかった。

しかし一方で、本当は心の奥底で、子どもを一人産んで、それで自分の人生をやり遂げたと言えるのか。全力を尽くしたと言えるのか。「まだ何か、足りない」ような、気もしていた。

でも、果たしてもう一度妊娠できるのか。実はそこに一番自信が持てずになっていたのが正直なところだった。

娘に対して、「期待に応えられない母親としての自分」を、わざわざ見せたくなかったのだ。見せずに済むのなら、迷わずそちらを選択したかった。

そんな日々を暫く過ごした頃だった。気付くと娘は赤ちゃんを望むようなことを口になくなっていった。「もう諦めたのかな。まあ、よいよ。きっと、何か他の事でやるべき事があるのだろう」と、考え始めた矢先だった。

娘が書店で釘付けになった写真集があった。助産院での出産、赤ちゃんの誕生を収めたものだった。「凄いものを見つけた!」「自分が求めていたのはこれだ!」と、言わんばか

りに目を輝かせていた。その純心な目に見つめられ、はつきりと降参し、覚悟した。「もう、逆らわない。妊娠を望もう。そして叶わなかったら、素直に『ごめんね』と謝ろう。でももし授かったなら、その時は、喜んで受けよう！ この身体でよければ使ってもらおう！」

私の決心が伝わったのか、娘は満面の笑みでこう言った。

「赤ちゃんが生まれるところを見たい！」

三

私はいつからか、まどろんでいた。

無垢の木の床、畳の香り、和紙を通した温かく、薄ぼんやりした灯り、望めばお風呂も沸いていた。それから付き添いの助産師さんは、いつでも腰のあたりを温めてくださり、私は布団に横になってもよければ、大きなクッションに覆い被さってもよかった。

娘は隣りの部屋から、好きに出入りしてよいようにしていた。

まどろむ筈である。「もう、今日出てこなくてもよいかな」そう思った瞬間だった。

——「あ！ きっと出てこれないのだ！ 私が、肝心の母親の私が、心から待ち望んでなかった……」

今回の妊娠は、娘があまりにも強く望んだからこそ実ったというような、極端に言い換えると、まるで娘の赤ちゃんが、私の身体を通過して生まれてくるというような感覚だったのだ。

ドツと涙が溢れ、

「ごめんね！ 出ておいで！ お母さんも待ってる！ 本当に待ってる！」

——嘘のような話だが、間もなく次女は生まれてきた。ニルンとも、ヌルンともいえるくらいスムーズに。

痛みがなかった筈はないが、思い出そうとしても、何か快感、言い表しようなない気持ち良さしか記憶にないのである。間違いない、気持ち良さ、快感が痛みより優っていた。

四つん這いの体勢で、股の間からゆっくり出てきた赤ん坊は、人間の赤ちゃんというよりは、まるで小犬のようだった。出てきたまま、そのまま胸に抱いた。可愛くて、可愛くて、可愛かった。そして、涙が溢れるのと同じに、大きく笑った。嬉しくて、そして何だか訳もなく可笑しくもあったのだ。私は一体、何が心配だったのだろう。そして、赤ちゃんというのは、やっぱり全てを知っていると感じた。そう思うと、また可笑しかった。私が声を立てて笑っていたのが聞こえたらしく、長女がフラッと部屋に入ってきた。

「生まれたよ」

と、伝えると、

知ってたんだね

「やったあ」

と、驚いたことに、初めての生まれたての赤ちゃんを心から愛しそうに見つめた。それから何の躊躇や迷い、ためらいもなく、「可愛い。」と、嬉しそうに抱っこさせてもらっていた。

私はもう、本当に幸せだった。そして、「絶対に、もう一人産みたい」と思いながら、喜びと嬉しさに満ち満ちながら、幸せな眠りに落ちていった。